

フリーな位置に関する概念の学習がパスの技能に及ぼす効果

発表者 杉江 拓也
指導教員 吉野 聡

キーワード：教授内容知識、ゲームパフォーマンス評価法、バスケットボール

1. 緒言

近年の球技指導は、Bunker、Thorpe (1982) の TGfU モデルが提案されたことにより、ゲームと切り離して技術の練習を行うのではなく、ゲームの理解によって、ゲーム中の技能が発揮されることを重視している。このような影響を受け、修正した教材を用いて、ゲームを行う中で技能を向上させる研究が多くなされている(岩田 2005、鬼澤 2008、岡田 2013)。しかし、鬼澤 (2007) らは、課題として「学習過程における教師の指導方法のあり方についても検討していかなければならない」と述べている。修正した教材についての研究だけでなく、教師が直接的に指導すべき内容や方法についても明らかにする必要があると考えられる。

このような問題を背景に、宇井ら (2014) は、指導の方法として概念の学習を用いた。ゲーム状況下でのボールの受け方について①パスを受けられる位置②マークを外すための移動コース③動くタイミングの概念(考え方)を指導することで、ゲーム中の技能が改善されたことを明らかにし、概念の学習による効果が示唆された。ここで述べる概念とは、物事の意味や内容のことを指している。ゲーム中に意味も分からずプレイをしていた初心者が、プレイの概念を学習することで、「なぜ」、「どのように」というようなプレイの意味や内容を把握することができる。これによりゲームについての理解を深め、ゲーム中における技能の向上が期待できる指導の方法であると考えられる。

本研究では、ゴール型の技能に関する指導の方法として概念の学習についての知見を増やすために、ボールを持たないときの動きだけでなく、ボール操作のパスについても技能が改善されるか検証する。特に、ゴール型の中で認知度が高く、手で扱うため比較的パスが容易なバスケットボールを用いる。ゲーム中にフリーな味方にパスをつなぐ技能が低い女子大学生を対象とし、フリーな味方にパスをつなぐ技能を改善するための方略として、フリーな位置に関する概念が及ぼす効果について検討することを目的とする。

2. 研究方法

2-1 対象者

①対面になって、ボールをキャッチすることやねらったところに投げることができる②ゲーム状況下で、フリーな味方にパスをつなげない、以上の2つの条件にあてはまる女子大学生3名(ゴール型競技経験なし)を対象とした。選定の方法は、8メートル間隔で対象者にパスの交換をしてもらい①ができることを確認した。その後、課題ゲーム4分×2本を行い、撮影したゲームの映像から、研究協力者2名による観察評価によって②と評価されたものを対象者として選定した。

2-2 課題ゲームの設定

5対5(対象者2名+研究協力者3名と対象者1

名+研究協力者4名の2チーム)のバスケットボールのゲーム4分×2本を課題ゲームとして設定した。ルールは、ボール保持者から直接ボールを奪うことを禁止として、ゲームは、目立った反則以外はプレイを止めずに行った。

2-3 データの収集

ゲームの映像とゲーム終了後のインタビューに対する対象者の発言を収集した。ゲームの映像は、ボールの動きにあわせて動かしながら、全てのプレイヤーの動きが映るように撮影を行った。ゲーム後のインタビューでは、「ゲーム中のパスについて何を考えていたのか」について聞き、指導の効果を図るために、指導を受ける前と受けた後の発言内容から指導の効果を検討した。

2-4 研究のデザイン

対象者間多層ベースライン法を用いて実験を行った。本実験では、標的行動を「フリーな味方へのパス」として実験を行った。

2-5 指導の内容

本実験を実施するのに先立ち予備実験を行った。そこでは、指導の内容として、①フリーな位置②パスのコース③パスのタイミングを指導の内容とした。その結果、①フリーな位置については効果が見られたが、②パスのコース③パスのタイミングについては、指導の効果が見られなかった。

そこで本実験では、フリーな位置に関する概念を指導の内容として設定した。学習方法として、正事例と負事例の両方を提示することと、なぜ正事例(負事例)なのか言語化するような概念の学習方法(辰野 1997)を用いて指導を行った。フリーな位置の概念についての指導をした後、対象者1名と研究協力者5名による3対3のミニゲームを行い指導された内容の実践を行った。

2-5 データ分析

ゲーム映像から、対象者の「フリーな味方へのパス」の集計の方法として、ゲームパフォーマンス評価法(GPAI)を用いて行った。「フリーな味方へのパス」とは「フリーな味方に対して投げたボールが、守備者に取られることなく味方に届くこと」と操作的に定義して集計を行った。信頼性を確保するために研究協力者2名(ゴール型経験10年以上)の観察者相互間の一致率が基準となる80%を超えるまでトレーニングを繰り返した結果、93%の一致率が得られた。

3. 結果と考察

3-1 フリーな味方へのパスの成功率

フリーな味方へのパスに関する成功率を集計し、表1にまとめた。対象者Aは、指導前の課題ゲーム1で、試合1本目50%、2本目50%と低い成功率であった。指導後の課題ゲーム2では、試合1本目71%、2本目81.2%、課題ゲーム3では、試合1本目85.7%、2本目71.4%、課題ゲーム4では、試合1本目77.7%、2本目85.7%というように成功率

の向上が見られた。

対象者 B は、指導前の課題ゲーム 1 で、試合 1 本目 60%、2 本目 50%、課題ゲーム 2 では試合 1 本目 60%、2 本目 100%であったのに対し、指導後の課題ゲーム 3 では試合 1 本目 77.7%、2 本目 85.7%、課題ゲーム 4 では試合 1 本目 75%、2 本目 80%という結果が見られた。この課題ゲーム 2 の 2 本目で 100%の成功率が表れたのは、対象者 B 以外の味方（対象者 A+研究協力者 3 名）が最低でも 8 回以上のパスを出す機会があったのに対し、対象者 B は、パスを出す機会が 1 回だけであったためである。映像を見ると、ボール保持者と対象者 B の間にマークマンがいることが多く、また対象者 B は、マークマンをはずす動きが見られなかったため、パスを受けることができなかったと考える。対象者 B のパスを出す機会は、味方と比べて明らかに低いため参考程度に結果を示すこととした。

対象者 C は、指導前の課題ゲーム 1 では試合 1 本目 50%、2 本目 50%、課題ゲーム 2 では試合 1 本目 60%、2 本目 50%、課題ゲーム 3 では試合 1 本目 50%、2 本目 66%と低い成功率が続いていた。指導後の課題ゲーム 4 では試合 1 本目 83%、2 本目 85%と成功率の向上が見られた。

したがって、A、B、C 総じて指導前は、パスの成功率は 50%から 60%代であったのに対して、指導後のパスの成功率は 70%から 80%代まで向上した。これらの結果から、対象者はパサーから見たフリーな位置の概念の指導によってフリーな味方に対してパスがつけられるようになったと考えられる。また、対象者 A、B は、指導前のゲームと比べて、指導直後のゲームだけでなく、後日行ったゲームでも依然として成功率が大きく下がっていないため、概念の指導の効果が保持されたことが確認できた。

3-2 フリーな位置に関する概念の把握状況

指導前と指導後のフリーな位置に関する概念の把握状況を表 2 に示した。指導前と指導後で、対象者に対して「ゲーム中のパスについて何を考えていたか」を聞いた結果、指導前のゲームで対象者 A、B、C は 3 人ともゲームの中で、どのような状況か判断できず、近くにとりあえずパスを出すという発言の内容であった。

しかし、指導後のゲームで、対象者 A、B ともに「このぐらいの距離ならパスが出せる」や「(マークが) いない人につなげればいい」と発言の内容が変容した。対象者 C も発言内容は少し異なるが、「確実に出せると思ったときに出すように気をつけてやれた」と発言の内容が変容した。これらの指導前と指導後のインタビューに対する発言内

容の変容から、対象者は学習したフリーな位置の概念をもとにゲーム中のパスの状況判断を行っていたことが分かり、フリーな位置の概念を把握しており、指導の効果が確認された。

表2フリーな位置に関する概念の把握状況

対象	発言内容 (指導前)	発言内容 (指導後)
A	・どこを見ていいかわからないです ・近い人に投げちゃう	・このぐらいの (マークマンと味方の) 距離ならパスが出せると分かった ・マークの人を見るようになった
B	・周りの人の動きがよく分からない ・すぐ近い人に (パス) 出しちゃう	・指導を受けて (マークが) いない人につなげていけばいいやと思った。
C	・ボール持ったら誰かにすぐ投げたくなっちゃう	・ボールを持って考えて、確実に出せると思ったとき (フリーなとき) に出すように気をつけてやれた。前は、マークがついてるってより自分が見て、一直線上に (自分とパスを受ける人の間に) 誰もいなかったらパスを出していた。

4. まとめ

本研究では、フリーな味方にパスをつなぐ技能を改善するための方略として、フリーな位置について概念が及ぼす効果について検証することを目的とした。ゲーム中にフリーな味方にパスをつなぐ技能が低い対象者 3 名に対して、フリーな位置の概念について指導を行い、その指導前と指導後のフリーな味方へのパスの成功率とフリーな位置に関する概念の把握状況を分析した。

実験の結果、指導前と比べて、指導後のフリーな味方へのパスの成功率が向上した。また対象者に対してインタビューを行った結果、指導前は 3 人とも、どこにパスを出していいか理解していなかったが、指導後は、マークマンを見てフリーかどうかの判断をしており、発言内容から概念を把握していることが考えられた。よってこれらの結果から、フリーな位置の概念を学習が、パスに関する技能の改善につながることを示唆された。

しかし、対象者はパスの受け方を理解していないため止まってしまうことが多く、パスを出す機会にも影響していた。ゲームのパフォーマンスを向上させるためにも、ボールを受ける動きについても改善できるような指導の内容を検討しなくてはならないと考える。

5. 文献

- 1) グリフィン著 高橋・岡出 監訳 (1999) ボール運動プログラムー楽しい戦術学習の進め方 大修館書店
- 2) 鬼澤陽子 (2007) 小学校高学年のアウトナンバーゲームを取り入れたバスケットボール授業における状況判断力の向上 体育学研究 52: 289-302

表1 フリーな味方へのパスの成功率

対象	課題ゲーム1 (指導なし)		課題ゲーム2 (Aのみ指導)		課題ゲーム3 (Bのみ指導)		課題ゲーム4 (Cのみ指導)	
	1本目	2本目	1本目	2本目	1本目	2本目	1本目	2本目
	成/試 (割合)	成/試 (割合)	成/試 (割合)	成/試 (割合)	成/試 (割合)	成/試 (割合)	成/試 (割合)	成/試 (割合)
A	3/6 (50%)	3/6 (50%)	5/7 (71%)	13/16 (81.2%)	6/7(85.7%)	5/7(71.4%)	7/9(77.7%)	6/7(85.7%)
B	3/5 (60%)	2/4 (50%)	3/5 (60%)	1/1(100%)	7/9(77.7%)	6/7(85.7%)	3/4(75%)	4/5(80%)
C	3/6 (50%)	2/4 (50%)	3/5 (60%)	2/4(50%)	2/4(50%)	6/9(66.6%)	5/6(83.3%)	6/7(85.7%)
平均	8.1/8.8(92.0%)	7.2/7.8(92.3%)	6.7/7.4(90.5%)	7.1/8.0(88.7%)	7.5/8.4(89.2%)	7.8/8.7(89.6%)	6.7/7.0(95.7%)	8.4/8.8(95.4%)

備考) 平均=研究協力者の平均、成=パスの成功回数、試=パスの試行回数、割合=パスの成功率